市民新聞グループ 岡谷市民新聞・下諏訪市民新聞・諏訪市民新聞・茅野市民新聞・たつの新聞・みのわ新聞・南みのわ新聞共通版

ふるさとのお宝再発見 ⑫

市民新聞グループの土曜特集
週刊 見る
この特集をさらにご希望の方は、新聞販売店かお近くのコンビニでお求め下さい

城向山瑠璃院照光寺 ②

大隅流伊藤（柴宮）長左衛門矩重の彫刻

「唐獅子手鞠の朱珠は転がるか」！

岡谷市

本堂にある彫刻は実に多彩です。中でも次の三つの彫刻には、驚かされます。

本堂外壁面 正面欄間の唐獅子と牡丹

三面の欄間には唐獅子が七頭牡丹の花の中で遊んでいます。唐獅子はライオンをモチーフにした中国伝来の空想上の動物で「百獣の王」とされています。全身巻き毛で覆われ古くから美術工芸の意匠に使われています。「牡丹」は「百花の王」で、勇猛な百獣の王「唐獅子」と艶麗な「牡丹」の組み合わせは取り合わせがよいとされています。昨年任侠映画を彩った菅原文太、高倉健が相次いでしくなりましたが、昭和40年ころ背中に唐獅子と牡丹の彫り物をして緋牡丹お竜の藤純子と銀幕を飾ったことは私たち団塊の世代には懐かしい思い出です。しかし「百獣の王」唐獅子でも無敵ではありません。唯一の弱点は巻き毛に潜く虫で、この虫はやがて皮膚を食い破り肉に食らいつき最後は身体を滅ぼします。この虫を「獅子身中の虫」といいます。ただこの虫は牡丹の花から落ちる夜露に当たると死んでしまうとされていて、ために夜、獅子は牡丹の花の下を安住の場所として休むとされています。このことから唐獅子と牡丹は一緒に描かれるわけです。さて高倉健の背中には唐獅子と牡丹が合わせて彫られていましたが本来、男女が惹かれ求め合う姿から考えると、健さんの背中には唐獅子のみがあるのが本当であって、それ故にお竜姉さんの緋牡丹と合い惹かれ合うべきだと思うのです。

中央＝本堂正面欄間。唐獅子が鞠と戯れている。左の写真の唐獅子が珠を転がる

さて、照光寺の唐獅子欄間の中央の一枚には三頭の獅子がはねていますが、中央の唐獅子は鞠と戯れ、紐をくわえ、右前足で鞠をしっかと押さえています。驚くべきはこの鞠は籠彫りになっていて中に朱色の珠が彫り抜かれています。1793（寛政5）年の建築ですからすでに222年を経過し、この朱の色は若干色があせてはいるものの、当時塗ったままの色です。一体何を塗ったのでしょうか。さらには、この珠はことによると突けば転がるのでしょうか？ 竣工時に柔木の彫刻にこの鮮やかな朱の珠は圧倒的な存在感があって、見た人の感嘆のどよめきが聞こえてきそうです。お寺にお願いして、ちょいと突いてみました。なんと動きます。222年の時を超えて転がるのです。どうすれば、何日かければこの様に彫る事ができるのでしょうか。驚異的です。

朱珠も 雪見て転ぶ 籠の内 天沙

内陣正面中央欄間 迦陵頻伽

サンスクリット語（kalavinka）の音写。妙音、美音、妙音鳥などと訳す。雪山、極楽浄土にいる想像上の鳥。聴いて飽きることのない美声によって法を説くとされ、人頭鳥身の姿で表され る（大辞泉）。江戸18世紀の浄瑠璃「夕霧阿波鳴渡」の中に「誠ある傾城と伽陵頻伽のおん鳥は絵に描いたも見た者ない」という台詞があるそうで、傾城も迦陵頻伽も現代では言葉すら知る人は少ないと思いますが、江戸期には庶民にもなじみがあったと思われますし、迦陵頻伽は女性なのです。

本堂内陣正面中央、迦陵頻伽（かりょうびんが）の欄間。中央やや左下に鳥の足が見える＝写真は照光寺提供

迦陵頻伽の図柄は日本に8世紀には伝わったとみられ、涅槃図や装飾の華蔓、仏の光背など広く使われています。よく天女と間違われますが、衣の裾からのぞく足をよく見ると鳥の足が彫られていますのでよく見てください。鳥の足は一見とても異様な感じがします。手に持っているのは蓮の花でしょうか。迦陵頻伽は近隣では松本市の1713（正徳3）年建築の金峯山牛伏寺観音堂（本堂）の外部正面上部にあります。牛伏寺は明治維新には高島藩領であり廃仏毀釈の難から逃れて残りましたが、外部にあるため若干の劣化が見られます。新潟県魚沼永林寺では名工石川雲蝶の彩色の迦陵頻伽を見ることができます。照光寺の迦陵頻伽は保存状態といい、華麗さといい、その彫りの端麗さといい、素木の彫刻の良さが感じられる最高傑作と思われます。彫刻するのには必ず元図「ひな形」、北斎漫画のような台本が必要ですがこのような精緻な彫刻の元図は一体どこにあったのでしょうか。全て長左衛門の作意の中にあったのでしょうか。長左衛門一人で全てを彫ったとは考えにくいのですが、木彫の技量は日本文化が世界に誇れるものです。照光寺の迦陵頻伽の左右の欄間は衣からのぞく足は見えません。従って左が琴を弾く天女、右は笙を吹く天女です。

本堂脇陣板欄間の3枚にわたる波間をうねりくる龍の彫刻

脇陣板欄間 「波と龍」「桐と鳳凰」「松と笹」

龍は高松塚古墳やキトラ古墳の彩色壁画にあるように、東方を守る神獣です。北は玄武（色は玄＝黒・季節は冬）、西は白虎（白と秋）、南は朱雀（朱と夏）、東は青龍（青と春）。中央は皇帝自身を表す時がありその時は黄龍。皇帝の高貴な色は着物にも現れる特別な黄色です。

（四神獣が四方に表現された本殿があります。岡谷市出早雄神社です。覆い屋の中にあり普段は見ることはできません）。

さて、この板欄間に刻まれた龍は波の間に間をうねりくる様が生き生きと彫られています。板状であるにもかかわらず龍の面構えといい、波のしぶきといい、波に見え隠れする胴体や尾が3枚に渡って彫られています。龍は三亭九似の相を持ち、瑞獣とされています。すなわち高貴で上品。角は鹿、頭は駱駝、目は鬼（兎）、項は蛇、腹は大蛇（蜃）、鱗は魚（鯉）、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似るとされています。口ひげがあり顎の下に宝珠を持ち、喉の下に1枚だけある逆さの鱗を「逆鱗」といって、触れられると激高して触れた者を即座に殺すといわれています。5本の爪を持つ龍を最高位であるとしています。先般岡谷蚕糸博物館に展示されていた中国皇帝の衣は黄色で龍の爪は5本であった思います。反面「龍生九子」といって非常に好色であり9頭の子をなしたそうです。「蜃」という亀が石碑を背負っている像を中国でよく見掛けますが、この蜃も龍の子どもで「蜃」の引き倒し」という言葉の語源になっています。獅子に似ている「俊猊」は香炉の飾りに付いています。「饕餮」（青銅器の饕餮文の饕餮）、釣り鐘の飾りにある「蒲牢」も龍の子どもです。

諏訪市湖南の善光寺本堂の欄間「波と兎」

そんな目でこの板欄間の龍を見ていたら何となく、少しいたずらそうな目でにらまれました。傑作です。

さて先般紹介した藤森広八の祖先・藤森次郎右衛門包好建築の諏訪市湖南の善光寺本堂にも「波と兎」「松と鷹」など枠の黒い部分や板の彫り様に本当によく似た板欄間があります。1747（延享4）年建築で長左右衛門の生まれた年であって、照光寺建設時には長左衛門46歳ですから参考にしたり影響を受けたり、あるいは一緒に彫刻に携わった彫師が関与した可能性を感じさせます。善光寺の板欄間も素晴らしい彫刻ですから機会があったらぜひ訪ねてみてください。

桐と鳳凰の解説は、一昨年8月24日付の「お宝再発見 東堀正八幡宮」に記載してありますので、お読みいただきたいと思います。この照光寺板欄間の桐の花は1輪しか咲いていませんが、1輪故に存在感があり、葉や鳳凰と実によく調和していて感心します。

○

以上の特徴ある彫刻を紹介しましたが、先般紹介した水屋には「龍と十二支」、開山堂には「笛を持つ天女」、平成の大改修の本坊唐破風には司馬温公の瓶割りや獅子、獏など多彩な彫刻を見ることができますので、この時期、足下に気を付けながら222年の時の流れと空想の世界に思いを馳せれば長左衛門や彫師の気の一端を感じることができるのではないでしょうか。

（岡谷市文化財保護審議会委員、諏訪市文化財専門審議会委員で、諏訪総合設計代表の宮坂正博さんに執筆していただきました）

次回は諏訪盆地東端地域の文化財（茅野市）を紹介します。